勞働者諸君に訴う

植村諦著

日本アナキスト連盟

昭和三十一年四月五日印刷
昭和三十一年四月十日発行
〔定価二十円〕
著者　植村諦
発行者　印刷者　大沢正道
発行所　東京都大田区調布大塚町六〇三
日本アナキスト連盟
電話（72）六〇四五番
振替東京一四四七二二番

1 先ず平和を！

マルクスが「全世界の労働者よ、団結せよ！」と叫んでから既に百有余年が経過した。その間にロシアと中国に革命が起り、東欧、東独、北鮮、ユーゴー、ベトナムに共産主義政権が樹立され、これらの諸国が連帯して他の資本主義諸国に対立して世界を二分し、いわゆる「二つの世界」の冷戦、熱戦がつづけられている。このことがまた第三次世界大戦の危険をはらみ、それが互いに原・水爆を擁して人類の破滅さえも予想され、全世界の人々を憂慮させている。

世界の情勢がこの段階に立ち至つた今では、革命より先に平和が大切である。というのはもし原水爆による戦争が始まれば資本主義も共産主義も存在しないからである。人類の一切の文化と生存が否定されるからである。われわれが共産主義と言い、資本主義と言つて争つているのも、今日の不合理な社会の組織を改めて合理的で公正な社会を作り、人類の幸福と繁栄を願うからに外ならない。しかるにその考え方の争いから人類を破滅に導くようなことになつたとしたら、それこそ本末転倒で一切が無意味になつてしまうであろう。

重ねて言う「今日の世界の段階では」世界中の人は先ず平和を守るために一切をささげなければ

ならぬ。

2　革命のいとぐち

ここに皮肉なことがある。それはさきにあげた共産主義諸国の革命や政権の樹立が、労働者農民の組織の力でなされたというより、いずれも戦争の結果によつてカチ得られたということである。資本主義諸国が自国の繁栄とその基礎を強固にするために企てた戦争が却つてますます共産主義国家をふやしたという皮肉である。それは資本主義自身の中にもつている皮肉の一つであつて、資本主義の生産と購買と市場の法則の矛盾は最後には戦争にまで発展せざるを得ないものであり、その戦争の結果資本主義国家の組織が混乱し、弱体化した時に革命が行われたという結果になつたのである。もし資本主義諸国の戦争による破壊と疲弊と混乱がなかつたなら、ロシアにしろ、中国にしろ、あの当時の労働者農民の組織狀態で果して革命をなし得たであろうか。

ここのところはとりちがえられると困るので、だから革命のためには戦争もやむを得ないと言つているのではなくて、今までの革命は労働者農民の組織の力で行われたというよりも、資本主義自身の自壊作用の方が大きな動因であつたということを指摘しているまでのことである。ましてさきにのべたように、この次ぎもし戦争が起つたなら人類の破滅さえ予想されるとき、如何に革命の大きな誘因になるからといつて、われわれは戦争を認めることはできないであろう。それにもかかわ

らずこの問題をここにとりあげたのは、労働者、農民自身の自主的な組織がしつかりしていなかつたら、せつかくの革命が如何にゆがめられたものになるかという問題のいとぐちとして提出したのである。

3　先進革命に何を学ぶか

かつてクロポトキンは「革命は如何になされてはならないかをロシア革命は教えた」と批判したのに対して、共産党をはじめ進歩的陣営から、革命を批難し阻害するものとして盛んな悪罵が放たれた。

革命を批難するのではなく正しく批判することが、果して反動であり革命を阻害するものであろうか。革命には多くの犠牲と混乱が避けがたいことが予想される。またその混乱のために予期されていた成果や目的が想いもかけない方へそれたり、歪められたりすることもある。これから社会革命を達成しようとするわれわれが、大きな努力と犠牲を払つて行われた先進革命を冷静に批判し分析して、彼等の払つた無駄な犠牲や誤りを再び繰り返さないことこそが何よりも大切ではないか。それこそが先進者の労苦に報いる道でなければならない。

この点われわれはソ連と中国という二つの大きな革命の実例に学ぶことのできる幸福を持つている。しかるにその思想と組織の故とは言いながら日本の共産党はソ連や中国の革命をこのような態

度で学ぼうとはせず、日本の実情や、その歴史的、社会的環境をかえりみず機械的な模倣をことし、中国やソ連の指令や批判ひとつで猫の目のようにその政策を変え、同じ誤りを犯そうとしているのは遺憾なことである。

あれほど熱烈な革命家であり、ロシア革命の報を聞いて希望に眼を輝かせながらロシアに帰つてきたクロポトキンに「革命は如何になされてはならないか」と言わしめたものは何であろうか。

4　革命は如何になされてはならぬか

彼がそこに見たものは、プロレタリア前衛の名による一握りの共産党員の独裁専制の支配であつた。革命によつて当然新しい社会の主人とならねばならぬ労働者、農民も、彼のブルジョアどもとひとしなみに彼等の支配に絶対服従を強いられた。これに従わないものは敵味方の差別なく牢獄、流刑、銃殺を以てこれにのぞんだ。自らの意志によつて新しい社会を作ろうとしたウクライナの農民が如何なる虐殺にあつたか。かつての革命の協力者であつたアナキストも流刑と牢獄に追いやられた。

古き支配者は倒されたが、新しい支配者はそれ以上の苛酷な権力を以て人民の上にのぞんだ。地主とブルジョアジーから解放された農民・労働者は新しい共産党独裁国家の使用人とされてしまつた。それはノルマによつて強制される新しい国家の使用人に過ぎなかつた。それを強制するものは

チミツに張りめぐらされたピラミツド形の官僚組織とスパイと警察と牢獄であつた。自らが主人とならねばならぬ労働者、農民プロレタリアートは相変らずこのピラミツドの底辺にいて強力な支配を受けねばならなかつた。

もちろん、革命の第一の目的は自由と解放であらねばならぬ。その自由が現代社会に於ては経済的不平等によつて拘束されているから、先ず平等な分配ということが革命の第一着手となるのである。しかしたとえ経済的にある程度の公平が保たれたとしても、人間の最も基本的な欲求であり、人格の根底である自由ということを無視して強制によつて行われるなら、それは革命の第一義を失つたものである。

極端な例だが、刑務所は一応衣食住を保証し、労働のノルマによつて給付を公平に扱つている。そこで人間が最も渇望するものは飢えではなくて自由である。もし自由が与えられるなら、彼等は飢えをも辞しないであろう。

革命のほんとうの成果をはかる基準はその国の総生産量がどれだけ上つたかとか、工業力がどれだけ上昇したかとか言うことではなくて、先ず第一にその国の人民がどれだけの自由を享有しているか、その社会的な生産がどのように実際に個々人に公平に享有されているかということにあらねばならぬ。もし国家そのものは富強にはなつたが、その国の人民が権力によつて強制支配され、労働のノルマによつてその労働を強いられているとしたら、そんなものは革命ではなくて単なる支配

者の交替に過ぎないだろう。

ソ連の七百万の共産党員が権力と特権を以て一億数千万を支配しているとしたら、今日のブルジョア社会に於てもそのくらいの比率の人間は特権と権力をにぎつているだろう。革命は断じてそのような特権者の交替ではない。

このことはわれわれが決してソ連や中国の革命を批難しているのではない。人類史上におけるこの二つの革命をわれわれは高く高く評価しているのだ。それだけに革命に対する根本的な観念と方法の誤りのために、せつかくの革命がどこでそれてしまつたか、それ故にこれからわれわれの社会を変革しようとするに当つて何を学ぶべきかを言つているのである。

5　国家権力は自然に消滅するか

これに対して彼等は言うのである。

諸君の言うのはもつともだ。しかしそのような理想社会が一朝にして来るものではない。革命の当初における社会的混乱を防止し、国内国外の反革命と戦い、ブルジョア国家の攻撃から革命を防衛し、プロレタリアートの自覚を高めこれを真に組織して行くためには、先ず政治権力を奪取し、これをプロレタリアートの手に收め、その独裁によつて強行することは避けることのできない手段である。やがて革命が次第に完成され、人民の自覚が高まり、一切の反革命やブルジョア的要素が

死滅して行くに従つて国家権力も次第に消滅し、諸君の言うような社会が来るのである。その段階を無視して一挙にそんな社会ができるように言うのは空想だ、と。（レーニン「国家と革命」）

しかしこの説には出発点の誤りがある。最初から革命は労働者、農民諸君が主人にならねばならんのだ。

諸君を誰も支配してはならないのだという前提に立つて、すべての労働者の組織や社会機構を考え革命のプランを立ててやつて見たが、結果としてやむなくそう言う最悪の事態になつたのだと言うことと、始めから自分が権力を握る目的をもつて、そういう風にプロレタリアートを教え、それが当然だと思いこませることとは出発の根本がちがつている。革命がどんな様相で行われるかは、労働者や農民の組織や自覚の状態と、そのときの国内、国際情勢によつて決定されることであつて、始めから独裁権力が是非必要だと言う論拠はどこにもない。

かつて大杉栄が「お前がロシア革命をやつたとしたらどんな風にやつたか」と聞かれて「似たようなことをやつたかも知れん、しかし精神がちがうよ」と答えている。それはあの時のロシアの情勢では、ある時期には似たようなことになつたかも知れんが、出発点もその後の経過もちがうと言うことだ。

また彼等は権力自身が持つている自転法則というものを知らない。人間というものは誰でも権力によつて人から命令されたり、支配されたりすることを嫌う本能を持つている。従つてことの良し

悪しにかかわらず、権力に対しては常に有形、無形の絶えざる反抗がある。権力者はまたそれに対して常に脅威を感ずる心理を持つている。独裁にスパイがつきものなのはその故である。従つて反抗があればますます抑圧が強くなり、抑圧が強くなればますます反抗が強くなるという風に、この自転法則は権力の強化の方向へこそ向え、決して彼等の言うように自然消滅の方向に向うものではないのである。

このことはソヴイエト革命後四十年の歴史を見れば明かであろう。ソ連の国家権力は彼等の言うように、革命の進行とともに自然消滅の方向へ向つているであろうか。レーニン時代よりスターリン時代へ、スターリン時代から今日に至るまで、その権力はますます強大となり、自国ばかりでなく、他国の干渉にまで乗り出し、さながら赤色帝国主義的様相を帯び、いわゆる「二つの世界」の一方の相手として世界を戦争の危機にふるいあがらせている。その間、国民に対してはもとより、党内に於てすら幾度かの血で血を洗う権力抗争はまだわれわれの耳に新なところである。このことは権力というものは自ら放棄しない限り決して自然に消滅するものではないことを物語つている。

6　新しい社会の芽ばえ

では、どうしたら権力を消滅させることができるか。この問題を個人と社会の両面から述べて見よう。

一体近代の開花、民主主義や社会主義の出発は個人の自覚から始まつた。原始共産社会から封建時代まで個人は社会の従属物であるか、領主や支配者の従属物であつた。それが個人は如何なるものにも犯されることのない独立尊厳の人格であるという自覚から近代が始まつたのである。天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らずという自覚の下に人格の平等という観念が生れ、そこから人が人を支配し、他人を隷属化する社会の組織が誤つていると言う観念から一切の社会主義思想も民主主義思想も生れたのである。

しかるに資本主義社会はその貨幣の流通と資本集中の法則に従つて、極端な貧富の差を生じ、この経済的な不平等が少数者の支配による多数者の奴隷化を招来した。この不合理を改革しようとする社会主義思想が、もし資本主義社会の独占と個人主義を匡正することに急なる余り、ただ経済的平等さえ達成できれば、一切の個人の自由や人格の平等を無視して、個人を社会やその支配者の隷属物とするようになつたら、われわれは数千年前の、まだ個人の自覚のなかつた原始共産社会に逆戻りすることではないか。

われわれが求める新しい社会とは先ず個人の平等の人格が基本であつて、その人格の平等を社会的に維持保証される経済的平等の社会でなければならない。われわれが中央集権的、独裁共産主義国家に反対するのは、この個人の自覚を出発点とする近代社会の発展の方向に反しているからである。われわれは古い奴隷のクビキを脱して新しい奴隷にはなりたくはないからである。

この個人の自覚は近代社会の発達とともにますます明確になつて来るだろう。教育の普及と科学の進歩はそれを助長するだろう。自己の成長と社会の発展を自分の頭脳で理解することができるようになつた人間が、他人の専制や支配に甘んずる筈はないからである。ソ連や中国の独裁制が成功したのは、当時の両国の教育人口がわずかに一〇パーセントから一八パーセントに過ぎなかつたことを考え合さなければならない。

また科学の進歩と生産手段の複雑化、分業化は如何なる偉大なる頭脳と雖も、すべての部門を一人で知ることはできないし、それらのすべてに権威を持つことはできない。真に知らないものが、権威を持たないものが、それぞれの部門の真の必要や幸福をはかれるわけがない。それにもかかわらずすべてを支配しようとすれば、警察と軍隊を背景とした国家の暴力による強制以外にはないだろう。

今日の政治というものは、右と左とを問わず、この近代科学の進歩に反して、不可能を権力によつて強行しようとしているものに外ならぬ。もし真の政治というものが存在するなら、各部門の自治管理と、その全体的な融合と調整をはかるコンダクター以上のものであつてはならなくなるだろう。

7　国家の観念は崩壊しつつある

かつてクロポトキンがその「近代科学と無政府主義」の中で予見したように最近の科学の驚くべき進歩は旧い国家の観念を崩壊せしめつつある。無線通信と航空機による交通通信の発達は世界中のニュースが即時にわれわれの耳に達し、一日にしてわれわれは地球の反対側に達することができるようになつた。世界の空間は昔のままだが時間は何百分の一に短縮された。如何なる国の政治、経済、学術、芸術も世界的連帯によつてしか処理できなくなつた。今日のはげしい世界政治の角逐の結果とは言いながら、旧い国家観念の基本と言われた主権、領土、人民も一国だけでは維持できなくなつた。国家主権の実体であるかの如き他国の軍隊を自国内に駐留せしめて当然とせざるを得なくなつた。今日二つの世界の主軸といわれるソ連もアメリカも一国では立てなくなつたのだ。

更に原子エネルギーの生産力への利用が発達すれば世界の生産様式が一変し、それに従つて経済学を始めあらゆる関連学術は変革されるだろう。労働価値は時間によつて計られるというマルクスの素朴経済学説も変改されなければならないだろう。

このような個人の自覚の発達と、旧い国家観念の崩壊過程の中で、権力なくして個人の自由と社会の幸福が一致する方法があるだろうか、それを考えて見よう。

8　秩序は人民が保つている

政治権力の支配に長い間慣らされて来た多くの人々は、もしこの社会から政治権力がなくなつた

ら社会はたちまち無秩序と混乱に陥るだろうと思つている。また現在の支配者や、未来の新しい政治権力を打ち立てようとする人々は、そういう人々の思わくを利用して、そうだ、そうだとおどしあげる。それはちようど長い間籠の中に飼われていた鳥が、もしこの籠を飛び出したら自分はたちまち猛禽におそわれて食われてしまうのではないかと考える不安と同じであり、それを利用して飼主は、そうだとも、そうだとも、ここが一ばん安全なんだと説き聞かすようなものである。

しかし現代社会の秩序とは一体何だろう。資本主義社会の富の集中法則によつて、少数の富者や特権者のために、大多数の人々が自分の欲しもしない仕事に長い時間働かされ、それでも満足に生きては行けないばかりか、働きたくても仕事もない数百万の人が生命の不安におびやかされているような現在の社会をこのまま維持して行こうとするには、強暴な権力の強制がなかつたら、それこそ大混乱に陥つてしまうであろう。およそ権力や強制というものは、このような不合理を維持しようとするからこそ必要なのであつて、人民の欲することを、人民自身の合議と協力によつて管理して行く場合に、どうして権力が必要であろうか。人民の、人民の手による、人民のための政治という純粋民主主義の世界に権力や強制があるべき筈はないのである。

しかもこのような不合理な社会の秩序さえ、権力や強制によつて維持されているのは極めて僅かな部分であつて、その殆んどは人民の自主的な社会的良心によつて保持されているのである。僅かにそのワクからはみ出た少数者を取締るために、国家は数千億の国費を使つて警察と軍隊を養い、

その費用をまた人民から税金としてまきあげているのである。自縄自縛というのはこのことであろう。もしも人民がその自主的な社会的良心を失つて、すべてを権力と強制によつて行わねばならないとしたら、人民と同数の警官が必要であろう。

しかし新しい権力と独裁を打ち樹てようとする人たちは言うだろう。そのような不合理な秩序を強制する権力は必要でなくとも、社会主義の原則であるすべての人に公平なる分配と平等を保証するためには、それを統制する権力が必要であろうと。

われわれは一応それを認めるとしよう。しかし、一握りの独裁者たちが、どうして各地域、職域の真の必要と公正を知ることができようか。それを真に知つているのは各地域、各職域に働いている人民自身でなければならない。もし全体の調整と公正を期するためならば、各地域、各職域から民主的に選ばれた委員たちの全国的連合以外にはなし得ないであろう。

9　革命の波を流しこむ溝

「革命は如何になされてはならないかをロシア革命はわれわれに教えた」とその失敗を悲しんだクロポトキンは「それは革命の波がおしよせて来たとき、それを流しこむ溝が用意されていなかつたからだ」といつている。せつかくの革命が来たとき、労働者、農民、人民大衆にしつかりした自覚と、社会管理の訓練と組織ができていなかつたら、それは権力者や野心家に簒奪されてしまうと

言う意味である。

事実あの当時のロシアには少数の共産党員やアナキストや社会民主主義者がいただけで、工場にも農村にも人民自身の組織はできていなかつた。ただ長い間の圧制と貧窮と戦争の惨禍からのがれたいという人民の強い欲求が国の隅々までひろがつていた。そして長い戦争によつて疲弊した帝政ロシアの権力の根底は崩れかかつていた。それによつて旧い権力は苦もなくほろびたが、人民自身の自覚と組織がなかつたために、せつかくの革命が新しい権力者に簒奪されてしまつたのである。

われわれが独裁権力に反対しつづけているのも、裏から言えば、この人民の自覚と自主的な組織の必要を力説しているのである。もしそれがなかつたら幾度変革を繰り返しても、それは単なる権力の交替に終つて、またまた新しい支配者が現われて来るだろう。

10. すり替えられた労働組合の精神

マルクスが「万国の労働者よ団結せよ」と言つた真の精神は、労働者の団結と組織によつて現存権力を打倒して、自らの社会を建設せよという意味でなければならなかつた。

しかるに、間もなくそれはすり替えられて、社会民主主義者は「労働組合の目的は団結の力による労働者の地位の向上と日常生活の改善にある。諸君の根本的解放はわれわれが政権を取つてからだ。だから、こぞつてわれわれに投票せよ」と言い、共産党は「われわれは諸君の前衛だ。われわ

れを支持し、われわれの戦略戦術に従い、われわれの指令に従つて行動せよ」という。社会民主主義者は改良主義と漸進革命をエサにして、自己の政権を打ち立てようとし、共産党は労働者の前衛と誇称して新しい独裁権力を夢みている。いずれも労働者自身の欲求や自主的な組織力をねむらせて、すべてを自己の手中におさめようとはかつている。

このような傾向に対して、労働者自身の自主的組織とその自由連合を強硬に主張したバクーニンとマルクスの争いが第一インターナショナルの分裂であり、日本に於ては大杉栄を中心としたアナキストとボルシェヴイキを中心とした一派との全国労働組合総連合に於ける分裂であつた。

以来数十年、幾多の変遷を経てわが国の労働組合は、今日共産党の独裁的政策には目をそむけているが、社会民主主義者（社会党）の偽瞞に乗ぜられて、日常闘争に終始し、現存社会の改革と新社会の建設に対する意欲を忘れてしまつたかに見える。またこのような労働組合の傾向は現在の支配者の最も歓迎するところであつて、彼等は労働組合法なるものを制定して「労働組合は労働者の地位の向上と日常生活の改善のためにたたかうものである」というところにしばりつけて置こうとする。そして労働組合がもし政治家の力を頼らないで、自らの組織と力によつて問題を解決しようとする活動を少しでも見せると、現在の支配者はもちろん、社会民主主義者や共産党までがロをそろえて「あれはサンヂカリズムだ。労働組合の精神を逸脱している」と批難する。

つまり政治家というものは如何なる政党も労働組合を自分の手足とし、踏台として置こうとする

ことに変りはないのである。つまり支配し利用するには、組織され、団体となつていることは大変便利であるから、彼等は一応は組織と団結をすすめるのであるが、必ずそこにオルグを送りこんだり、幹部を送りこんだり、ボスを手なづけたりして、自分の思うままに動かすことのできるような準備を忘れはしないのである。

11　労働者は自己の力を自覚せよ

しかし労働者はそう言う政治屋どもに自分の解放をお願しなければならぬほど無力であろうか。先ず第一に考えて見るが良い。今日の社会生活を維持している一切の生産機構、分配機構、交通通信、教育等すべての運営は、直接には労働者、農民自身が握つているのだ。それは政党でも、資本家でも、地主でもない。諸君自身なのだ。彼等はただ法律―権力を背景にして、諸君の上に坐わり、諸君を支配しているだけだ。諸君が一旦その手を止めれば社会の運行は一日にして停止してしまうのだ。諸君は今日現実にその力の所有者なのだ。その力を自分が持つていることを自覚していないだけだ。もしすべての労働者、農民がほんとうにこの自分の力を自覚したら、何で自らの解放を政党や政治屋どもに委ねる必要があろう。

殊に現在の日本に於ては、歴史上未だかつて見られなかつた規模に於て労働者、農民が組合として組織されている。これは敗戦の唯一の收獲と言つて良い。その分野は交通、通信、教育、文化か

らあらゆる産業にわたり、また官公庁、自治体の職員に至るまで約六百万の労働者、農民、勤労者が組織されている。

その組織の広さと数に於ては、日本において未曾有のことであるばかりでなく、世界のどこの国と比べても優れたものと言わねばならぬ。殊にこれを革命当時のソ連や中国の労働者、農民の組織状態と比べるとおどろくべき規模の組織と言わねばならぬ。それにもかかわらず日本の社会機構が一向に変革もされなければ改善もされないばかりか、却つて反動逆行化の傾向さえも強くしているではないか。これだけの大組織を持ちながら根本的な労働者、農民の解放が一向に進捗しないのはどういうわけであろうか。

12　労働組合の目的

それはこれらの勤労者の大組織が支配者や政治屋どもにまどわされて、労働者組織の根本的使命と目的を忘れているからである。

いうまでもなく労働者の組織と団結の目的は、その力によつて強力な現存支配権力と資本主義組織に対抗し、これを打倒して、新しい社会主義社会を組織建設し、自らがその社会の主人となつて、ながい奴隷的生活から万人を解放することにあつた筈である。しかし、そのためには全勤労者が組織と団結の力に目覚め、新しい社会意識に目覚め、新社会管理の能力を習得して行かなければ

ならぬ。それは一朝にして出来ることではない。そのためには労働組合の日常闘争は非常に大切である。

労働者一人一人の力は資本家の前にはさながら奴隷のように弱いものだが、労働組合の力によつて対等に対抗し、賃金値上げを通じての生活、施設の改善、不当くび切りや、その他の不合理な資本家の措置と戦い、これに打ち勝つことによつて、労働者は始めて自己の力を認識し、奴隷的意識を捨てて、新社会の主人たる自覚も生れて来るのである。

その意味で労働組合の日常闘争こそは最も大切な実践的訓練であるばかりでなく、現在の社会組織が存続する限り、労働者の生活を守る唯一の手段でもある。労働組合が「革命の学校」だと言われるのはこのような意味に於てである。しかしそれはあくまでも労働者の根本的解放への手段であつて目的ではない。もしも労働組合がこの大きな目標を失つて日常闘争を目的と考えてそれにのみ偏向するような状態に陥つたら、労働者の解放はいつまで経つても来ないのではないか。

このような意味で今日の日本の労働組合の現状を見るといささか日常闘争そのものが目的であるかのような偏向に陥つてはいないだろうか。なるほど春季闘争、年末闘争、夏季闘争と、季節、季節の大規模な賃上闘争が行われ、それが或る程度政府や資本家をゆるがしてもいる。また基地闘争や平和擁護や憲法改悪反対の闘争にも参加して一般民主主義化の運動に大きな力を与えている。

しかしそれは根本の所で労働者の一般利益の擁護というところに局限されていて、労働者の根本

的解放という大きな目標に労働者自身で近づこうとする意欲に欠けているのではないだろうか。そのために、ソ連や中国の革命の当時と比べて、客観状勢のちがいはあるとは言いながら、自ら何事もしようとせず、自己の解放を社会党や共産党が政権を握る日に期待しているという結果に陥つている。しかしそれではその期待が実現したとしても、諸君の真の解放が得られないということはさきに述べた通りである。

諸君がもし自己の力を自覚するなら、六百万の労働者があらゆる社会機構の中に組織されていながら、僅か二百人足らずの社会党議員を議会に送つて、その政権争奪の泥仕合を見ていることはないではないか。諸君にして一たび立てば現存政権の打倒の如きは一日にして成るのである。しかし打倒は容易であるが、その時にこれを管理防衛する訓練が諸君になされていなかつたら、またまた新しい支配者が現われて諸君の解放の事業を纂奪して行くだろう。

われわれは先ず革命の波を流しこむ溝を用意して置かなければならない。このような訓練が今日の日本の労働組合にはいちばん欠けているのではないか。

13　労働組合の組織と運営

始めに述べたように、われわれは革命の際にこれを新しい権力者や支配者の手に渡してはならない。それを合理化しようとする政党や政治屋どもは機会ある毎に革命時の混乱を避けこれを防衛す

るためには権力と統制が必要であることを力説する。もし労働者、農民諸君が、自らの力でそれをなすことができなかつたら、彼等の説に服し、彼等の支配に甘んじなければならないだろう。そのために労働組合は日常闘争を通じての現在の支配組織の打倒に向つての意識を高め、力を組織すると共に、来るべき社会の担当者、管理者としての、組織や方法についての計画と訓練を怠つてはならない。

一体今日の社会の中央集権的政治組織は、資本主義社会の資本の集中法則の政治的表現に外ならない。現代社会のあらゆる階級序列はこの資本集中の序列に即応して政治的に表現されている。然るにわれわれの求める経済的平等を約束される新しい社会に於て、その政治組織だけが中央集権や独裁制であつて良いと言うのは、それ自身自己矛盾である。経済的に平等な社会における政治組織は当然中央集権的なものでなくて平等平面的なもの、ピラミッド形態でなくて網状形態でなくてはならぬ。中央集権的でなくて、自治連合体でなくてはならぬ。

ここで問題になるのは交通、通信を始め、近代産業経済が、一国的というよりは世界的になつている時、これと自治的な管理とがどういう風に調和するかということであろう。そこでわれわれは複式網状組織ということを提唱する。その輪廓を示すために諸君の属している労働組合とその全国的連合に即して話して見よう。

諸君は先ず諸君の属している組合を徹底的に民主化しなければならぬ。民主化とは言うまでもな

く、みんなの、みんなの手による、みんなのための運営である。それは少数の幹部に全権を委任して、その指揮命令に従うということではない。一人の人間が、あらゆることに通じて処理することは現代社会に於ては不可能であることは始めに述べた。文化、教育、技術、生産、接渉その他それぞれの能力に応じて、その一事についてだけ委任するのである。これは諸君の属している職域、地域の一組合についてのみではない。その全国的の連合の場合にも同じである。そしてその全体的な調整は各部門の合議によつて決するようにしなければならぬ。この全権委任の方法が如何に不合理なものであるかを説明するために、今日ブルジョア社会における民主主義の基礎であるかの如く言われている代議政治を例にとつて考えて見よう。

代議制度は周知のように一地域から多数決によつてある定員を選び出し、その人に任期中すべての全権（生殺与奪の権—どんな法律を作られるかわからない）を委任する。しかしその地域の中にはあらゆる職業の人が住んでいる。その人が如何に有能な人であつても、すべての職業、すべての境遇の異なる人々の要求を知ることは出来ないし、それぞれの職業や境遇によつて利害相反する場合どうしてそれを代表することができようか。しかも現在の選挙法にはリコール制はないから、任期中彼が如何に選挙民の意志に反したことをしても、これを呼び戻すことはできないので、一度び選ばれた代議士が選挙民の意志を無視して如何に勝手なことを議会に於てやつているかは、諸君が毎日痛感されているところであろう。

このような例から、われわれが学ぶところは全権委任ではなく一事委任とリコール制（任期中でも選挙人の委託に反したときはいつでも呼び戻せる）と、各部の合議制の原則を守ることによつて先ず組合自体の中央集権化を防ぎ民主化を徹底させることである。

この原則はまたわれわれが全国的連合を考える場合にも適用されなければならない。総評を始めとして今日の労働組合の全国的組織は殆んど中央集権的で、一委員長、一書記長や少数の幹部に全権が委任されている。これをさきの原則に従つて全国的な自由連合組織に改め、一事委任の原則に従つて、産業別、部門別、職能別、地域別に全国的な組織を作り直さなければならぬ。そして各部の全国的合議制の確立によつて諸君は全国の産業を掌握することができるのである。このことがもし完全にできたなら、さきに述べたように現支配機構の打倒の如きは、政党や政治屋に依頼せずとも一日にして成るのである。

14　新らしい社会のための訓練

しかし現在の支配機構が打倒できても、新社会の管理の計画と能力を今日から準備し訓練して置かなかつたら、新しい野心家や権力主義者に革命を奪われてしまう。

そのためには前章で述べた全国的組織を基幹として、自らが全産業を管理する場合を想定して、原料を全国的にどう調整し、配分するか、生産されたものをどう配分するか、農民組合、農業協同

組合と如何に連繋し、食糧を如何に配分し、都市の製品と交換するか等々を、科学的に調査し研究しておかなければならぬ。その場合機械的な全国的平等公平というようなことにこだわると統制的な官僚組織が発生するから、先ず地域協議会に於て交換の方法を検討し、地域的に満されないものを地方的なものに移し、地方的に解決されないものだけを全国的機関に於て調整するのである。このような場合われわれに有利なことは全国の自治体官公庁の職員が全部組合に組織されているのであるから、このような科学的資料と計画は直ちに立つのである。

もしも反動や反革命や野心家がこれを破ろうとしても、諸君が全産業をしつかり掌握してさえいれば、ゼネストを以てこれに答えれば、彼等は一日にして屈服するだろう。この場合、われわれの組織は中央集権的でなく、全権委任ではないから、かつての二・一ゼネストのように少数幹部が圧迫されたところで、全組合を動かすことはできないであろう。

15　む　す　び

以上長々とのべて来たが、われわれの言いたいことは簡単である。せつかくの革命が新しい支配者や独裁者を迎えることであつてはならない。支配と独裁は中央集権的な組織の必然の結果であつて、どんな美名をかざそうと、支配と統制を叫ぶ政党はすべて革命のさん奪者である。だから諸君は自分の解放を他人の手に委ねてはならぬ。労働者の解放は労働者自身の力でやらねばならぬ。諸

君は現実にその力を持つているのである。今日諸君は実際上全産業を掌握しているのである。ただそれを自覚していないだけだ。

全産業、交通、通信、教育、文化、官公庁自治体の全分野にわたつて、六百万の労働者が組織され、全国数万の農業協同組合を擁しながら何で自己の解放を政治屋どもに委せねばならぬのか。われわれが提案した方法で諸君が再組織され、諸君が自ら立ち、そして自ら管理するならば、政府と称する無益有害なものがなくなり、諸君が真の主人となる自由の社会が来るのである。諸君が自覚して立ちさえすれば、諸君は力を持つているのだから、それは遠い未来ではなく、すぐそこにあるのだ。